原種のフジバカマ（藤袴）について

原種のフジバカマの花

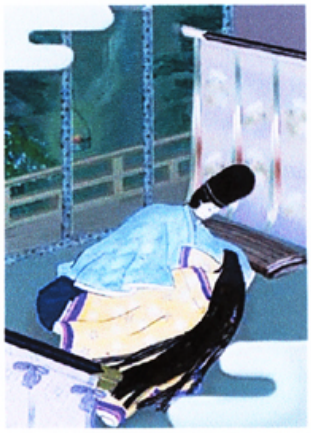
フジバカマは，キク科の多年草で，９月から１０月にかけて，藤色がかった白い花をつけます。

昔から，河原や野辺に咲く山野草として親しまれてきました。

文献では「日本書紀」に最初に現われ，「万葉集」には秋の七草として詠まれています。

秋の野に 咲きたる花を指折り（おゆびおり）
かき数ふれば 七種（ななくさ）の花
萩の花 尾花 葛花 撫子の花 女郎花 また藤袴 朝貌（あさがお）の花

（山上憶良，万葉集）



平安時代に紫式部が書いた源氏物語三十帖「藤袴」の巻には，主人公の光源氏の使者として，玉鬘を訪れた源氏の息子の夕霧が，藤袴の花に託して，恋する玉鬘に贈った歌があります。

同じ野の 露にやつるる藤袴 あはれはかけよ かごとばかりも

乾燥させたフジバカマの葉は昔から香料として用いられ，都の殿方たちは，フジバカマを香袋に入れ，そっと着物に忍ばせたそうです。

やどりせし 人のかたみか藤袴 わすられがたき 香ににほひつつ

（紀貫之・古今和歌集）

いま、絶滅の危機に

平安時代には，河川の土手や池の辺など，あちらこちらに自生していたフジバカマですが，近年は農道や水路の改良，河川堤防の補強などによって，野生のフジバカマはすっかり姿を消し，環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧種に，また京都府でも絶滅寸前種に選定されています。

松栄堂のフジバカマは

１９９７年，京都市西京区大原野付近で，京都の植物研究者がめずらしい野草を見つけ，標本にしました。その標本からは香りが漂いはじめ，研究者を驚かせました。

これがフジバカマの権威である村田源先生により、野生種と判明し，京都府下で報告されている貴重な事例となりました。

このフジバカマは，「乙訓の自然を守る会」の藤井肇さんによって受け継がれ，大原野神社の境内と長岡京市の生態園で，大切に守られてきました。

この鉢に植えられたフジバカマは，交雑を排除するため，その原種からさし芽を取って育成してきたものです。

「藤袴」として市販されている園芸種は，原種のフジバカマとは葉の形や香り，花の色も違い，全く別のものです。

挿し芽を育て
鉢に定植する